

内科医のためのうつ病診療

第2版



著：野村 総一郎

A5 頁152 2008年
定価 2,940円(本体 2,800円+税 5%)
[ISBN978-4-260-00639-2]医学書院刊

高い評価を受けていたうつ病診療入門書『内科医のためのうつ病診療』(野村総一郎著)が10年ぶりに改訂された。野村氏は現在日本うつ病学会の理事長としてうつ病の研究、臨床、教育に専念している。国内だけでなく国際的にも広く活躍中の研究者であり精神科医である。筆者は心療内科を専門としていることもあり多くの精神科医との交流を持っている。信頼できる精神科医として、さらに友人として20年近くの付き合いがある。

本書は内科医はもちろん、うつ病診療にかかわるすべての医療職、心理職、企業関係者、家族にとって分かりやすい入門書といえる。著者は、うつ病診療の最大のポイントは「うつ病の概念を理解することである」と述べ、非専門医にとって分かりやすさ、実用性を第一主義の目的として本書を世に出している。本書を精読してみると、分かりやすさや実用性だけでなく、広範な内容に十分深い検討が加えられていることがわかる。まさに、この一冊でうつ病がわかる専門書ともいえる。

筆者が本文中で興味を持った表現をいくつか挙げておく。まず、うつ病のサブタイプに関して、うつ状態と正反対の躁状態が存在するかどうか、

うつ状態の程度と睡眠・食欲のパターン、経過が長いかどうか、の3つの要素によって分類すると述べている。その結果、①大うつ病性障害(単極性うつ病)、②双極性うつ病(躁うつ病)、③気分変調症(気分変調性障害)、④非定型うつ病、の4つのタイプがある。さらに、このサブタイプと病前性格との関係を以下のように表現している。①大うつ病性障害は「几帳面で気を遣う真面目人間」、「凝り性でくどい、こだわり人間」、②双極性障害は「明るい、ハイでテンションの高いお調子者」、③気分変調症は「神経質で気にしやすい弱力性の人」、④非定型うつ病は「対人過敏、対人不信が強く、傷つきやすくキレやすいタイプ」とまとめている。

うつ病の病因論に関しては、「遺伝と環境の相互作用」によってうつ病は発症するとしている。遺伝子については単純なうつ病特有の遺伝子ではなく、「本来何かに必要な遺伝子」ではないかと述べ、「徹底性の遺伝子」の可能性について触れている。通常は非常に役に立っているのだが、ある種のストレスがかかると「それが裏目に出て」、一時的にうつ病の形をとるという考え方である。「徹底性」がかえって都合が悪い環境が「新奇な事態」である。うつ病が発症するのは新しい環境に置かれた場合だけではないが、「徹底性遺伝子」に都合の悪い環境でうつ病は生じるのではないかと述べている。

先に述べたように本書はこの一冊でうつ病のすべてがわかる実用書である。内科医だけでなく各科の臨床医、医療関係者にお勧めしたいものである。日本医師会には全会員の必読書として利用することをお勧めしたい。